

臨床心理査定に対する印象の変化

小 正 浩 徳

1. はじめに

臨床心理学を背景とした対人援助を行う資格として、「臨床心理士」がある。この資格は、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会の実施する試験に合格した者に交付される。1988年から資格が認定され、2015年には29,690名が臨床心理士の免許を所持している（大塚，2015）。

臨床心理士には四つの専門業務がある。それは、1. 臨床心理査定，2. 臨床心理面接，3. 臨床心理的地域援助，4. 1～3に関する調査・研究・発表である。これらは、臨床心理士資格審査規程に示されている。

龍谷大学文学部臨床心理学科では、この四つの専門業務のベースとなる臨床心理学の知見や実践をカリキュラムとして、大学教育を行っている。そのカリキュラムの一つに、「臨床心理査定（実習）」（以下、実習）がある。

本研究では、この実習を通して、受講生たちの臨床心理査定に対する印象の変容について検討を行う。

2. 臨床心理査定とは

臨床心理査定は、心理査定または心理アセスメントなどとも言われている。氏原（2004）は臨床心理査定の目的として、次のように述べている。

臨床心理査定は、それを受ける者の可能性を探るために行われ、決して異常を発見するための手段とならないようにすることである。そのためには、臨床心理査定を通して得られる客観的データを踏まえつつ、しかしそのデータの提供にのみとどまらず、臨床心理査定を受けた者と査定を実施した者との間に意味ある体験を持ちうるよう、そのデータについて「主観的」判断をする必要がある。

また、大塚（2015）は「診断」と「査定」の言葉を対比させ、次のように述べている。それは、「診断」は診断する人の立場から対象者を客観化し評価す

るのに対して、「査定」では、査定を受ける人の立場から、その人の独自性や個性に由来する“意味”を尊重して、その特徴を評価する、ということである。

これらの指摘から、臨床心理査定において学ぶべき重要な点2つある。それは、査定を受ける者の立場にたった視点と、その人の生活においていかに役立つものとなりうるかという視点である。

臨床心理査定の方法は、次の通りである（橋本ら、2014）。

一つめは「面接」である。「面接」とは、直接臨床心理査定の対象者と対話し、様々な質問を通して心理的な問題や特徴を明らかにするものである。二つめは「観察」である。「観察」とは、「面接」と異なり、直接対象者に関わるのではなく、なるべく影響を与えないようにしつつ行動を記述し、そこから心理的な特徴を推測するものである。三つめは「検査」である。「検査」とは、知能検査、パーソナリティ検査など標準化された検査を対象者に実施し、その結果をもとに様々な仮説をたて理解するものである。そして、これらの方法を通して、対象者を深く個別的に理解し、具体的な支援につなげていこうとするのである。

また、「検査」は心理テストとも言われる。心理テストは、最大量のパフォーマンスをみるテストと、典型的なパフォーマンスをみるテストの二種類に大別できる。

最大量のパフォーマンスをみるテストとは、いわゆる能力検査である。例えば、知能検査や職業適性検査等があげられ、これらの検査では、対象者ができるだけ正確に速く最善を尽くして検査に回答することを教示される（岡堂、2003）。

典型的なパフォーマンスをみるテストとは、対象者が出会う種々の生活場面で常にみられる行動を発見する目的で作成されたものである。具体的には性格検査のことであり、検査方法として、質問紙法と投映法（投影法・投射法）とがある（岡堂、2003）。質問紙法とは、質問文に対し「はい」「いいえ」「どちらでもない」などの形式で対象者に回答を求めるものである。一方、投映法とは、対象者にインクのしみによってできた図柄を示しそれへの反応や、対象者に描画を求めるなどを通して行うものである。

こうした「検査」では、それぞれの検査に習熟していることが求められる。検査の実施方法やその結果整理はいうまでもない。「検査」は対象者と検査者の関係性が影響を与えることもおおく、対象者との信頼関係を速やかに作るこ

により、「検査」の結果がより信頼できるものとなるからである（浅野，2013）。

3. 「臨床心理査定（実習）」について

実習では、「2. 臨床心理査定について」で述べたことを踏まえて、「臨床心理査定の効用と限界を知り、臨床心理検査を行う者としての倫理を学ぶ。臨床心理査定を実施しその結果を解釈したうえで、クライアントが生活の中で生かせるような結果の伝え方を考えられるようになる。」を目的としている。この目的を達成するために、「受講生の中で小グループを作り、グループ内で心理検査を実施する。結果や解釈は実習後各自でまとめ、期限までに行った心理検査の概略とともに報告書を提出する。心理検査用具は数に限りがあるので、ローテーションを組んで行う。なお、受講人数等により講義方法や実習であつかう検査を変更することもある」ことを講義方法として、シラバスに示している。

受講生たちは、事前に臨床心理査定とは何かについて文献をまとめレポートを提出したうえで、実習に参加している。

4. 方法

対象者：実習受講生10名（大学3年生，4年生男女）。

調査日時：X年4月（実習当初：第2回目の授業時）ならびに7月（実習終了時：最終回の授業時）の実習授業内。

実習当初において、5名ずつの2グループをつくった。そして、「臨床心理査定と聞いて、イメージすることはなにか。付箋一枚につき一つのイメージとして、思いつくかぎり書いてください」と教示した。その後、受講生たちは各自イメージを思いつくかぎり書きだした。

次に、各グループ内で付箋同士を見比べて同じ意味・内容を持つもの同士をA3用紙の上に貼りつけ、群分けを行なった。

その後、群分けされたものについて、各グループメンバーで話しあいを行ない、臨床心理査定についてイメージされたことは何かということについて、文章化し発表を行った。

実習終了時では、参加者が7名であったため、それを1グループにした。実習当初と同様に、「臨床心理査定と聞いて、イメージすることはなにか。付箋一枚につき一つのイメージとして、思いつくかぎり書いてください」と教示を行なった。その後、各自イメージを思いつくかぎり書きだした。次に、グルー

プ内で書かれた付箋同士を見比べて同じ意味・内容を持つもの同士をA3用紙の上に貼りつけ、群分けを行ない、話しあいを経て、臨床心理査定についてイメージされたことは何かということについて、文章化し発表した。

5. 結果

5-1 実習前におけるイメージの結果

実習前における第1グループのメンバーにおいて想起されたイメージ群（表1）について、そのメンバーによる説明の主旨は次のとおりであった。

表1 実習前のイメージ群 第1グループ

分類名	イメージされた言葉	分類名	イメージされた言葉
時間がかかる	時間がかかる	型にあてはめる	決められた型に当てはめる 機械的な感じ 作業 数値化 理系っぽい 分析する（される） 人をはかる 計・測・量
細かい	細かい		
臨床心理	臨床心理	心理テスト	心理テスト テレビとかでしている心理テスト 調査
技術面	技術が必要 （経験）熟練度が必要（検査する側）		
カウンセリングの過程	一番初めにすること 人との関わり	検査方法	質問紙 投映法・投影法 様々な種類の検査がある たくさんの種類・方法 WISC IQ ロールシャッハ
場所	精神科 （心の）クリニック		
カウンセラー	カウンセラー	内面	特徴わかる 人を知る 意外な一面がわかる タイプや傾向がわかる カウンセリングではわからなかった相手の内面がわかる 無意識 深層心理
対象者	大人もある 子ども クライアント うつ 発達障害		
対象者の気持ち	何か問題があるのかもしれない どんな結果がでるのか	性格	性格
答えが絶対ではない	数字の結果でも絶対じゃない 終わらない 答えがない 抽象的 あいまい 一つの目安 変わり続ける 解釈方法わからない		

＊イメージされた言葉は、対象者の表記した通りのままである。

臨床心理査定という言葉からそのまま連想された『心理テスト』群、さらにその具体的な手段である「WISC」や「ロールシャッハ」というイメージによる『検査方法』群がある。

臨床心理査定に対する印象である「決められた型に当てはめる」「機械的な感じ」「数値化」などのイメージによる『型に当てはめる』群と、それと対照的な「数字の結果でもぜったいじゃない」「答えがない」「抽象的」などのイメージによる『答えが絶対的ではない』群で分けられた。

臨床心理査定に関わる人と、その気持ちをイメージしたものとして、単独のイメージとなった『カウンセラー』、心理査定を受ける側の人たちとして「大人もある」「子ども」などのイメージによる『対象者』群、その気持ちとしてのイメージである「何か問題があるのかもしれない」「人との関わり」による『対象者の気持ち』群で分けられた。また、臨床心理査定が行われる場所として「精神科」「(心の)クリニック」というイメージによる『場所』群がまとめられた。

臨床心理査定が行われる位置づけとして、「一番初めにすること」「人との関わり」というイメージによる『カウンセリングの過程』群がある。

臨床心理査定によってわかるものとして、「特徴わかる」「タイプや傾向がわかる」といったイメージによる『内面』群と『性格』群に分けられた。

「細かい」「時間がかかる」は臨床心理査定に対する単独イメージとして考えられ、「臨床心理」は、これら想起されたイメージを包括する言葉として考えられた。

一方、第2グループのメンバーにおいて想起されたイメージ群(表2)について、そのメンバーによる説明の主旨は次のとおりであった。

想起されたイメージ群を大別すると、『姿勢』『知識』『感情』の3つに分けられた。

『姿勢』は5つの小カテゴリがまとめられていた。「共感することが重要」「クライアントが話しやすい環境作りが重要」に代表される『クライアントの関係づくり』カテゴリ、「状況にあったものを選択する必要がある」「守秘義務がある」に代表される『セラピスト側の心得』カテゴリ、「心理臨床の4つの柱の1つ」「治療過程への入口」に代表される『アセスメントの立ち位置』カテゴリ、「CIの状況状態確認」「心の病い」に代表される『気遣い』カテゴリ、「カウンセリングだけでなく様々な目的のために使える」は単独で『その他』カテゴリ、の5つであった。

表 2 実習前のイメージ群 第 2 グループ

大分類名	小分類名	イメージされた言葉	大分類名	小分類名	イメージされた言葉	大分類名	小分類名	イメージされた言葉
姿勢	セラピスト側の心得	状況にあったものを選択する必要がある 守秘義務がある セラピストは自身の限界を知っておく必要がある 他の機関との協力が必要 (ものによっては) 知識と経験が必要 説明責任 検査を実施することを納得してもらおうのが心配	知識	面接	面接室の風景 最初の面談 カウンセリングの最初に行うもの カウンセリングの基本 面接 診断 治療の第1歩目 スタートにあたってリラクゼーション(する)方法?	感情	セラピスト側の感情	イメージされた言葉 むづかしい 査定という言葉に恐怖 経験が少ない 一筋縄ではいかなさそう 迷い悩み 自分が被験者になりたくない 子どもは緊張するんだろうか
	アセスメントの立ち位置	臨床心理において重要な行為の1つ 治療の一部 治療過程への入り口 心臨床の4つの柱の1つ		査定の内容	心理テスト 心理調査 心理調査士 バウムテスト いくつもの種類がある		クライエント側の感情	長い時間は避けてほしい 拒否できるのかなあ 自分の内側をのぞかれるのイヤ! 「あなたに対して心理査定を行います」と突然言われたら緊張する。 自分を知る知ってもらう? 勇気がいる 興奮 緊張 検査本番では緊張してしまいそう
	気遣い	CI の状況状態確認 健康な (心の) 人にはあまりしないほうがいい 心の病い		情報収集	情報収集する場 情報集め 性格個性を知る		授業感想	臨床心理学を学んだおかげで体験できるのはありがたい TEG-II 以外は解らない 学習する機会を得てうれしい どんな内容か興味湧く 興味がある 木曜の3限 解釈がむづかしいと思う
	クライエントとの関係づくり	共感することが重要 セラピストがクライエントを査定していると同時にセラピストもクライエントに査定されている クライエントの話の内容以外にも注目 クライエントが話しやすい環境作りが重要 セラピストとクライエントの良い関係を築くために必要課程 傾聴姿勢 クライエントにとっては臨床心理にふれる第一歩 クライエントとの信頼関係	関係	関係	セラピストとクライエント テストバッチリーと か組むんだっけか			
	その他	カウンセリングだけでなく、様々な目的のために使える						

*イメージされた言葉は、対象者が表記した通りのままである。

『知識』は4つの小カテゴリがまとめられていた。「面接」「治療の第一歩目」に代表される『面接』カテゴリ、「心理テスト」「いくつもの種類がある」に代表される『査定の内容』カテゴリ、「情報集め」「性格 個性を知る」に代表される『情報収集』カテゴリ、「セラピストとクライアント」「テストバッテリーとか組むんだっけか」による『関係』カテゴリ、の4つである。

『感情』は3つの小カテゴリがまとめられていた。「長い時間は避けてほしい」「自分の内側をのぞかれるのはイヤ!」に代表される『クライアント側の感情』カテゴリ、「経験が少ない」「むずかしい」に代表される『セラピスト側の感情』カテゴリ、「学習する機会を得てうれしい」「興味がある」に代表される『授業感想』カテゴリ、の3つである。

5-2 実習後におけるイメージの結果

この回は3名の欠席があり、参加した7名を1グループにして実施した。その結果を表3に示す。

想起されたイメージについて、グループメンバーによる説明の主旨は次のとおりである。

想起されたイメージは11のカテゴリに分けられた。

1つめは「その人にあったものを」「検査の種類の多さ」に代表される『多様性』, 2つめは「様々な場面で使用(就活, 病院? クリニックとか)」「テストバッテリー」に代表される『使い方』, 3つめは「心理的特性」「自分を見なおすきっかけ」に代表される『性格』, 4つめは「解釈の曖昧表現が多い(文献, マニュアル)」「解釈は十人十色の可能性(バウムなど)」に代表される『解釈』, 5つめは「統計的」「過去の事例を参考にする」などに代表される『データ』, 6つめは「経験が要る」「相手のために責任をもって解釈にのぞむ」に代表される『スキル』, 7つめは「マニュアルに従って」「実施方法についてとても細かく定められている」に代表される『実施方法』, 8つめは「一つの検査に対して解釈を行うのに時間がかかる」「実施に時間がかかるものもある」に代表される『時間』, 9つめは「環境をしっかりと整える」「動作にも注意」に代表される『環境』, 10こめは「解釈が難しい」「大変である」に代表される『大変』, そして11こめが「検査をもっと学びたい」による『感想』であった。

これらの分類を通して、『多様性』と『使い方』を通じては、心理テストにはいろいろな種類があり、いろいろな使い方があることを学んだことを語った。

表3 実習後のイメージ群

分類名	イメージされた言葉	分類名	イメージされた言葉
多様性	いろんな種類がある 検査の種類の多さ たのしいテストもある 絵画 その人にあったものを	時間	一つの検査に対して解釈を行うのに時間がかかる 実施に時間がかかるものもある 検査実施に時間がかかる
使い方	様々な場面で使用（就活、病院？クリニックとか） 援助方法を決めるのに役立つ テストバッテリー 結果参考にするもの ×過信	実施方法	検査の注意点いっぱい マニュアルに従って 決められた手順で行わなければ意味がない 実施方法についてとても細かく定められている 初まりから終りまで注意点が山ほどある
性格	心理的特性 その人の一部がわかる 人を知る 自分を見直すきっかけ 機会があれば受けてみる 自己理解 人を理解するための一つの方法 細かな性格特性まで結果として出てくる 鏡	環境	緊張させてはいけな 環境をしっかりと整える 被験者に偏見持たない 動作にも注意
解釈	解釈は十人十色の可能性（バウムなど） 解釈があいまいになる 結果を操作しようと思えばできる。（被験者も） 解釈の曖昧表現が多い（文献、マニュアル）	スキル	経験が要る 相手のために責任を持って解釈にのぞむ 習熟 訓練が必要 経験が必要 検査について事前に学ぶ必要がある 専門 検査についての知識がいる
データ	過去の事例を参考にする 積み重ね 統計的 数字 置き換え 尺度	大変	解釈が難しい 難しい 大変である
		感想	検査をもっと学びたい

* イメージされた言葉は、対象者が表記した通りのままである。

『環境』と『実施方法』を通じて、環境を整えることも心理テストを実施する上で必要なことを知ったと語り、『実施方法』、『スキル』、『解釈』を通じて、実施するにも解釈するにもスキルが必要となることをあらためて思ったと語った。『データ』と『解釈』のつながりから、解釈はデータにそって行われることを学んだと語った。そして、『大変』と『感想』から、実際に心理テストを

行い、解釈をすることは、大変であったと語った。

このようなカテゴリ間のつながりから考えられたことをもとに、グループメンバーは、概念的なものよりも実際の大変さとかに比重がかかったイメージが想起されていたこと、査定を実践したことによる査定者側のイメージが、実習当初よりも増えたことに気がついたことを語った。

6. 考察

6-1 実習前のイメージについて

2つのグループに分けてイメージの想起をし、想起された事柄についてグループごとに話し合いを行った。想起された事柄のまとめ方にグループ間に違いが出たものの、想起された事柄自体には共通するものがあった。

その1つは「心理テスト」と「様々な種類の検査がある」ことである。学生たちは「臨床心理査定」という用語からは様々な種類の心理テストがあることをイメージしたのである。橋本ら（2004）がまとめているように、臨床心理査定は「面接」「観察」「検査」という領域があるのだが、学生がまずイメージするのは「検査」にあたる心理テストのようである。第2グループのイメージ群に「面接」という言葉があるが、これは、心理面接を行うために最初に行うものという意味であるとされており、橋本ら（2004）による「面接」とは意を違えるものである。

「心理テスト」のイメージが強いことについて、大学の心理学の講義においても、その受講動機を尋ねると「心理テストに興味関心がある」学生が少なからずいる。このようなことから、ここを知る手段として「心理テスト」は学生たちのイメージに強く印象づけられているのだろう。

2つめとして、ここを知ることに對して『対象者の気持ち』をイメージしていることであり、さらにそこには「どんな結果がでるのか」不安に感じている様子がみられた。これは自分では意識していなかった一面がみられるのではないかということの表れであろう。加えて、心理査定を通して得られた結果による「情報収集」の側面があることも共通すると考えられた。

3つめは、技術と経験や熟練が必要であり、査定を受ける対象者との関係作りや環境を整えることである。またそこには、「解釈が難しい」ことや「解釈方法がわからない」ことも共通してみられた。これは、浅野（2013）が指摘する、検査の習熟や対象者との信頼関係をつくることについて、学生たちがイメージしていると考えられる。

これらから、実習当初の段階で学生たちは、「臨床心理査定」について、「心理テスト」というイメージを強く持つ中で、自分たちがテスターとなること、対象者となることに対する難しさや不安を感じる中、知識の側面として、検査に対する習熟度や対象者との信頼関係を構築していくことの大切さを思い描いていることが表れているものと考えられる。

6-2 実習後のイメージについて

実習終了時では、3名の欠席があったため実習当初と同じ2グループでのイメージ想起が行えず、1グループでの実施となった。このため、グループを比較しながらの検討ではなく、1グループのみの結果を用いて検討する。

実習では、最大量のパフォーマンスをみるテスト、典型的なパフォーマンスをみるテストのそれぞれを取り扱って行った。これらのテストは決められた手順がマニュアルとして説明されていると同時に、そのテスト結果の解釈もマニュアルに示されている。こうしたことに実習で受講生たちが触れることによって、心理テストの『多様性』や『使い方』へのイメージがふくらんでいったものと思われる。実習ではまた、心理テストを受ける環境に関しても講義を行い、実際に体験している。そのうえで、得られた結果について各心理テストのマニュアルや関連する書籍を元に、受講生たちが各心理テストの解釈と、それらを総合した解釈の作成をかなりの時間をかけて行った。これらの体験が『環境』『実施方法』『データ』『スキル』『解釈』『時間』といったイメージにつながり、そして『大変』『感想』といったイメージをつくりあげていったものと考えられる。

カテゴリでは別々となったが、受講生たちは「その人にあったものを」「環境をしっかりと整える」「相手のために責任をもって解釈にのぞむ」といったイメージをもっていた。これは、氏原（2004）や大塚（2015）が指摘していた臨床心理査定の中での人間関係と、査定を受ける者の独自性や個性の“意味”を、受講生たちなりに捉えようとするなかでうまれたイメージだと考えられる。しかし、こうしたことは受講生たちには「解釈があいまい」になりやすく、「解釈が難しい」ものであるのだろう。

以上のように実習で心理テストを実施し、解釈を考えることがこうしたイメージとなったのであろう。

6-3 総合的考察

ここでは実習当初と実習終了時の想起されたイメージを比較し、検討を行う。

実習当初にみられていた「心理テスト」と「様々な種類の検査がある」では、知識的な側面からイメージされたと考えられた。実習終了時でも、同様に「心理テストの多種多様性」のイメージが想起された。実習当初に無かった「多様性」というイメージが加わったことは、実際に実習を行うことで、方法論や解釈といった体験からでてきたものと考えられる。

実習当初において、対象者側に立ってイメージされていた不安は、実習終了時には明確にイメージされていなかった。これは、実習を行うことによって、臨床心理査定を行う側からのイメージが強くなった面があるものと考えられる。そうした中で、『性格』のイメージ群に「自分を見直すきっかけ」「機会があれば受けてみる。自己理解」「鏡」というものがあった。これは実習当初のイメージの中で、自分では意識していなかった面では不安とされていたものが、実習を行い、結果を解釈していく中で、自分を知ることが不安ではなく、新たな気づきにつながったことから出てきたイメージなのではないだろうか。瀧本（2014）は、カウンセリング場面で心理テストにより自己理解をクライアントが進めることが、自分自身と一定の距離を置き、カウンセリングに対して適切な態度をもつことができると指摘している。実習では、受講生たちは検査者と対象者の両方を体験している。さらに、対象者としてグループメンバーが行った自分自身に対する解釈結果の報告を受けるだけではなく、そこから自分自身で自分のテスト結果を見直すことを、実習の課題としていた。これにより、瀧本（2014）の指摘にあるような自分自身を一定の距離をおくことができ、それゆえ、心理テストが鏡となって、自分を知ることによって不安ではなく、見直し自己理解というイメージが生み出される結果になったと考えられる。

実習当初みられていた技術と経験や熟練が必要であることや、解釈の難しさ、解釈方法のわからなさについて、実習終了後も同様にイメージとして想起されていた。そこでは、『スキル』『大変』『解釈』というカテゴリとしてまとめられていた。さらに細かくみると、『スキル』の中の「検査について事前に学ぶ必要がある」「訓練が必要」「経験が必要」や『大変』の中の「解釈が難しい」という、実習を行ったからこそそのイメージが表現されていた。また、単純に「時間がかかる」として実習当初にみられていたイメージは、実習終了時には『時間』として「一つの検査に対して解釈を行うのに時間がかかる」「検査実施に時間がかかる」とより具体的なイメージが想起されていた。

実習終了時の『解釈』カテゴリでは、「解釈があいまいになる」「結果を操作しようと思えばできる。(被験者も)」というイメージが想起されていた。このことは、例えば林(2003)や瀧本(2014)が心理テストの限界としてあげていることに通じており、これは実習を通して実感できた結果であると考えられる。

このようなことについて、津川・篠竹(2010)は、マニュアルや解説本を熟読するのは心理検査のビギナーには重要なことであるとしたうえで、機械的表面的な処理作業で終わるか、自己愛的な世界に落ち込む危険性があることを述べている。さらに、心理検査が行われている時間の中では、単に検査だけを行っているのではなく、対象者との関係作りや対象者自身の様子を検査での応答からも情報を得ているため、そうしたことへの習熟も必須であることも述べている。これらのことを回避し、専門性を身につけていくためには、スーパーバイズが必要であると、強く指摘している。

7. まとめ

実習当初と実習終了時のイメージの変化は、実習という受講生たちの実体験が影響を与えていることは、容易に想像できる。

体験学習の重要性として、無藤(1994)は、「積極的な意欲の喚起」と「体験を通して問題を発見する力を養うこと」ができることを挙げている。

「積極的な意欲の喚起」という点からは、実習終了時に「検査をもっと学びたい」というイメージが想起されていたことで伺うことができる。

「体験を通して問題を発見する力を養うこと」という点からは、上述したように、実際に臨床心理査定にふれることで、知識的側面だけではなく、実体験としてその難しさや考えなければならないことを見つけ出し、さらなる経験や訓練、習熟といったことの必要性を学んだと思われる。さらに、実習を踏まえて自己の一側面を知ったことから、今後の学生生活について、受講生なりに考えたこともあるものと想像する。

一方で、実習からでは十分学ばせていない可能性もあることが示唆された。それは、橋本ら(2014)がいう臨床心理査定「面接」「観察」といった点について、津川・篠竹(2010)の指摘する心理検査をより習熟させるために必要となるスーパーバイズの存在について、実習終了時のイメージの中には顕著に見られなかったことから考えることが出来る。また、実習では個人情報扱うことになるが、その倫理的配慮のあり方についてはイメージが想起されていなかった。

これらは体験学習の中からは見いだされにくいものであろう。そこで、この実習では、受講生たちの想起されたイメージを元に、受講生たちが気づきにくかった点について、講義していく必要があると考えられる。

本研究では、受講生たちの臨床心理査定に対する印象の変容について検討を行った。実習を行う前と実習を行った後では、実体験に基づく印象の変容がみられた。こうした変容を通して、受講生たちの学びが深まった側面が考えられた。同時に、実習で体験し感じられたことを通じて、受講生たちの気づきえなかった内容について視点を広げるための実習内での講義の重要性が改めて示唆されたものと考えられた。

文献

- 浅野正 (2013) 「心理検査によるアセスメント」 松原達哉編 『臨床心理アセスメント 新訂版』 丸善出版
- 橋本忠行・佐々木玲仁・島田修 (2014) 『アセスメントの心理学』 培風館
- 林潔 (2003) 「心理テストの効用と限界」 松原達哉・楡木満生共編 『臨床心理アセスメント演習』 培風館
- 無藤隆 (1994) 『体験が生きる教室』 金子書房
- 岡堂哲雄 (2003) 「臨床心理アセスメント総論」 松原達哉・楡木満生共編 『臨床心理アセスメント演習』 培風館
- 大塚義孝 (2015) 「臨床心理士の専門性と資格資質」 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会監修 『新・臨床心理士になるために 平成27年版』 誠信書房
- 瀧本孝雄 (2014) 『カウンセリングと心理アセスメント』 金子書房
- 津川律子・篠竹利和 (2010) 『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』 誠信書房
- 氏原寛 (2004) 「心理アセスメント (総論)」 氏原・亀口・成田ら編著 『心理臨床大事典 改訂版』 培風館

キーワード 臨床心理査定 大学生 印象変化